

## ディスカッション

上田：それでは、ディスカッションに移りたいと思います。少し内容に踏み込んだことや、例えば外邦図あるいは機密海図等を使って、今日いらした方でどういう研究ができそうか、あるいはどういう使い方があるかというような、実質的なところなども含めて、協議、ディスカッションできればと思います。

まずは、大塚さんのほうからは質問をいただいた点について、小林先生、今井さんのほうから、お考えになっていることがございましたら、回答をいただきたいと思います。

小林：外邦図とか水路図がどういうふうに使われたかというご質問ですが、水路図の場合船の航海士が利用したと思います。地図については、中公新書に書いたことですが、兵士や将校が書いた日記<sup>1</sup>のなかに、地図を複製したとかいう話がでて来たりします。最近見つけた例では、日清戦争の鴨緑江渡河作戦の時に上官から20万分の1の地図上に渡し船を用意して待機する地点を示されたけれど、地図だけではわからないので、水泳の上手な兵卒に偵察させたという記載が将校の書いた日記の中に出てきます。そういうもので推測する以外にはなさそうです。

もう一つ考えておく必要があるのは、地図は消耗品で、使ったあともしっかり残しておくということは非常に少なかったと思います。終戦のときに燃やしてしまったというのものもあるのかもしれませんが、どういうふうに使ったかということがよく分かる例は非常に少ないと思います。

それから参謀本部には大量の地図のストックがあったわけですが、地図は必要なときに備えて作っておくものです。例えば日清・日露戦争のときに使った20万分の1の地図は、1880年ぐらいから将校を派遣して準備を始めています。日清戦争の開始は1894年ですから、始めてから14～15年たったというときやっとうまく使うということになります。必要を感じてから急に作るわけにはいきません。準備期間が長くて、さらにストックしておいてどの程度使うかということになると、全然使わなかったというケースもあったと思います。あまり答えになったかどうか分かりませんが私からは以上です。

今井：機密海図の場合は、いわゆる艦隊司令部とか艦船のほうから要望があつて水路部が作っていますので、当然それを供給すればすぐ実際航海に使うということですね。しかも、海上で作戦する場合に、海図がないと船は危なくて走れません。むやみやたらに走り、結局座礁したりすると、せっかくの軍艦が故障するなど大きな事故になります。そういうことは絶対起こしてはいけませんのでやはり行動する場合は必ず海図を持って走ります。ですから、機密海図なんかは作られたものはちゃんと必要があつて作られて、利用されておりました。

大塚先生がおっしゃった仏印進駐についてですが、船を動かす場合に海図は必需品ですから、進駐するときなどには事前に用意して、船のチャートルームという場所に積み込んで動きました。ですから、もし日本の海図が作成できない場合は、英国やフランスの海図などを何らかの方法で入手して複製して使っていたと考えられます。日本は国際連盟を脱退してから、国際水路局というものからも脱退しました。それまでは国際水路局に加盟する国同士で海図の交換をやっていたのですが、できなくなって困った。そこで、各国在外公館ですとか、そういったところが収集したものを水路部に集めて、それを急速覆版する

1. 井ヶ田良治・山岡高志編「『征清戦袍余滴』(二) 山岡金藏中尉の日露戦争従軍日誌」社会科学(同志社大学人文科学研究所) 76号、141頁。

ということも実施していました。そういう外国版海図からの覆版海図というのは終戦時まで約3,600版ぐらい作っていたようですね。

ですから、当然ベトナムで何か作戦する場合は、何らかの、どちらかの国の海図を複製して使っておったと思います。

上田：続きまして、大塚さんのほうから、外邦図の利用の方法について3つお話がありましたね。

大塚：そうですね。例えばサイゴンーミトー鉄道とかがどのように敷設されたのかというところの、導入部分で外邦図にこういうものが描かれていますという、研究の全体像を示すときの導入で使えるかもしれないというのが1点目。

2点目としては、地図内の情報がどう描かれているかを分析してみると、当時、帝国日本が何を考えていたのかというのが少し見えてくるかと考えています。その一つの例として、フェイフォというのが、あくまで欧米からの名づけられたものであって、現地の呼び方とは違うというようなことをあげました。

3つ目として、先ほどからもご質問もいただきましたけれども、地図の周りにある情報について、具体的にはベトナムの外邦図の周辺情報を集めて、それをベトナムの歴史・地理とすり合わせてみると、何か出てくるかということ、今これからやりたい、やってみたいなど思っているところです。

地域、つまりベトナムとの関係ということでは、この3点を話しました。

上田：例えばそれぞれ小林先生、今井さんから、地図の、先ほど今井さんの機密海図についても、外側の情報についてもコメントがありましたが、地図の地形図そのものというよりは、その周辺にある、例えば機密というところでも3段階というのがあるし、赤い枠で囲われていたというのも多分外側の情報ということだと思いますが、何かその辺りで今まで地図を見てこられて、地図の外枠にある情報というものの、例えばこういった視点もあるとか、活用法もあるのではないかというようなことで、何か気が付いたことなどがありましたらと、ちょっとコメントいただければと思いますが、いかがでしょうか。

小林：私は古地図を使うときには、まず地図の書誌学が要ると考えています。誰がいつ作ったのか、どういう作り方したのかということですよ。秘密図の場合のように粗っぽい測量だったのか、きっちり三角測量からやったのかとかいうようなことは、地図を研究に使うときに大事なことです。

つぎに東南アジアの場合のように、出来上がった地図を日本がディプリケートするようなケースの場合は、どうやって入手したのかとか、それをどういうふうにディプリケートしたのかというのが検討課題としてあるわけです。例えば地名を全部片仮名に書き換えているような場合があります。日本の陸軍はある程度の学歴の人だったら全部読めるようにということを考えて地図を作ったわけです。ただし余裕がない場合はアルファベットのままということもあります。

書誌的な記載からこうしたプロセスがある程度わからないといけない。『立教大学所蔵外邦図目録』でも、地域名、地図番号、図幅名、縮尺、経緯度、それから縦横の大きさ、さらに色彩、測量機関、測量時期、製版・印刷機関と多彩な項目が記載されています。普通は測量した機関が製版も印刷もするわけですが、測量機関と製版・印刷機関を分けて記載しているのは、例えばフランスが作ったものを日本がディプリケートしたということが分からないと困るわけですね。それから、測量時期や発行時期も重要です。

たいへん記載項目が詳しく見えますが、これらだけでは足りないこともあります。例えば1枚の地図に幾つもの地図が入っているというケースです。記載された地図の一つ一つについて同様のデータが必要です。今まで作ってきた外邦図目録は1枚の地図についてエクセルの1行におさめています。だからこういう場合は、現物をきっちり見なおして、シートの各部分の地図を全部検討しないといけないわけです。

それで、さっきのフェイフォという地名の話も、もともとフランスの作った地図で、そのまま恐らく使っていると思います。時間がないときは、凡例のとこだけ日本語に変えるというのがあるわけですね。デュプリケートの仕方についてもいろんなタイプを区別しておく必要があります。

日本国内については、私たちは5万分の1の地形図とか、2万5,000分の1の地形図を使うときに、どういうふうに測量したかとか、どういう時期にやったかとかいうことを気にせずに使っているわけですけど、外邦図の場合は必ずその確認が必要です。

東南アジアの植民地の場合は欧米列強が作ったものですから、三角測量をもとにした地図が多く、使って問題がない場合が多いのですが、中国の場合、例えば日本が秘密測量でここそこと測量して作製したものですから精度が低い。地名も日本人が聞いたものですから、同音異字のような場合も起こってくるわけです。

それから、中国側が作った地図はそういう間違いがないかというと、初期に作った地図は精度が高いとはいえないものが多い。ただし、時期が新しくなるにつれてきっちりした測量が行われるようになります。

中国の外邦図は、私どもにとってはまだ魑魅魍魎（ちみもうりょう）の世界です。初期には日本軍の秘密測量による地図のほか中国側の簡易測量による地図をデュプリケートしたものが、さらに中国側の本格測量によるものをデュプリケートしたものもある。また日本の空中写真によるものも加わって、重層的に入りまじっています。それから、中国の場合は、省ごとに測量原点が違います。だから、省の境界付近について違う省の作製した地図と合せると、ぴったり合わないようなケースが出てくる。

広い中国全体をカバーする三角測量というと、たいへんな労力と時間がかかります。これができないままに各省がそれぞれに地図を作ったために、そういうことが起こったわけです。だから、全体としてどういう順序で何をどういうふうに作ったのかということが、きっちり分かるような研究をしないとイケないのですが、ようやくこの間勉強して日清戦争、日露戦争までは何とか分かってきたところです。それ以後についてはもうまだやるべきことがいっぱい残っています。

それから、大塚先生のコメントの中で、50万分の1の地図で鉄道がたまたま入っていて、他の地図で代替が利かないというようなケースを紹介されました。外邦図は、フランスの作った地図の幾つかをデュプリケートしてコレクションになっていて便利ですけども、やはりフランスがどんな地図をどの順序で作ったかという研究が必要ではないかと思えます。

京都大学のある先生がハノイについて詳しい研究をなさいました。いろいろなフランスが作った地図を使っていますが、フランスが作った何年の地図としか書いておられません。どの測量機関が、どんな縮尺で作った地図をこの研究に使っていることを示す一覧表がきっちり示されてないと、後で研究する者は困ります。

それから確かに人類学とか地理学の研究には、1万分の1くらいの縮尺の地図が一番適していますが、そういう地図はたいへんまれです。ただし、各コレクションの目録が出て、外邦図デジタルアーカイブのようなものが整備されて、どの地域について1万分の1の地図があるということが簡単に検索できるようになれば、そういう大縮尺の地図がそろっている地域を選んでフィールドワークをおこなうということも考えられます。こうした基礎的な作業が進んでいかないと、外邦図を使った研究の全面的な開花は難しいだろうと思いま

す。

そんなお金がかかる基礎作業は無理だよと言われるとつらいのですが、お話を伺って思ったことはこんなことです。

**今井：**機密海図については、日本海軍が作ったオリジナルですよ。その海図にはタイトルがあり、水深の基準や潮の干満のデータなど、測量のいろんな基準的な事柄が、表題の下に並べて記載してあります。そこをしっかりと理解されていれば、その海図の内容はよく理解できると思います。

あとは、先程お話ししましたように、機密の告示というのを出しています。要するに以後のアップ・ツー・デートの情報ですね。そういうものが図の左下に小改正、small correctionというのがありまして、そこに赤ペンで何年の何号を修正したものと記される。中には、図の中にブイが入った時期が記録されたものもあります。ですから、機密海図がいつまで最新に維持されたものかというのは、そこから読み取れます。

それから、片仮名、海図は全部片仮名表記になっています。先ほどもお話に出た、坂戸直輝さんが書いたものを見ますと、外邦図研究会の発表にも話があったと思いますが、地理学者を海軍のほうで何人か呼んでいろいろ委員会をつくり、そこで表記のルールなどを定めていたようです。そして、大学や学徒動員で集めた女学校などの学生、生徒に、地名を英語なり外国語から片仮名にするという、そういうことをやっていたと聞いておりました。

**上田：**それでは、フリーにそれぞれの疑問点・提言をいただきたいと思います。いかがでしょうか。

**フロアA：**今日は小林先生、どうも非常に貴重な話、ありがとうございました。

それで伺いたいのは、今日、先生もお話しされましたし、中公新書にも書かれておりますが、多田文男さんと田中館さんが秘密裏にその地図を持ち出したわけですね。もともとは東北大学でも集積されていた10万枚余りから、10分の1ぐらいに当たる1万余を持ち出されてということになりましょうか。それは相当な覚悟が要ることだと思いますが、そのときに、多田さんなり、あるいは田中館さんが、これはとにかく持っていきたいんだとした、その意図については、どのようにお考えになるのでしょうか。その一部が立教大学にも来ているわけですが。

**小林：**なかなか難しいご質問です。渡辺さんは、このままほっておくとアメリカに接收されておしまいとか、燃やされるということで、多田先生に声を掛けました。それから、田中館秀三、田中館愛橋の義理の息子ですけども、彼の場合はどういうことで参謀本部の地図を持ち出しになったかという経過はよく分かっておりません。渡辺さんに聞いたら、「田中館秀三は知っているが、それ以上は知らない」と言われて、二人の間で何かあったのではないかと想像しています。

外邦図を実際に参謀本部に取りに行った人って結構たくさんいて、東大の佐藤先生の場合のように、隣り合う図を接合してみると、描かれていることがきっちり整合しないような中国の地図には学術的に意味がないということで、日本国内の地形図で、秘密になっていた図を集めたというケースもあるわけです。

他方三井先生の話では、参謀本部に行ったらたくさん地図があって、はじめは一生懸命みていたけれど、そのうちにとにかく1種類の地図について10枚ずつを抜き出して、まとめて運んだということです。必要な地図だけを選び出すなんてことができない状態だった

から、もうとにかくできる限りいっぱい持って来たということです。

ただ、関連してよく分かってない問題がありまして、参謀本部から持ち出されて大学に収蔵されている地図の中には、満州とかシベリアのものが非常に少ないのです。アメリカ議会図書館で初期に調査した今里さん（現九州大学）は、北のほうの地図が非常にたくさんあるというわけですね。当然のことですけれど、アメリカは接収するときが一番関心をもっていったのは、やはり北のほうの地図だと思います。これからソ連と中国というのが相手になるわけですからね。なぜ日本の大学にある外邦図に北の方の図が少ないのかという基本的な点について、もう少し背景を検討してみる価値はあると思います。

それから外邦図を個人が持っているケースがあります。私たちが研究を始めた頃、東大の正門前の第一書房という古書店が大量に外邦図を売り出しました。その旧蔵者はさきほどお話しした兵要地理調査研究会のメンバーの1人で、後に大阪市大の教授になった村松繁樹という先生です。当時は学習院の教授でした。その先生のお宅から出たものだという事です。それから多田先生もかなりたくさんの方の図を持っていて、それが駒沢大学に寄贈されているわけです。また本郷三丁目の琳琅閣という古書店が外邦図を少しずつ売り出していますが、その旧蔵者は東大の東洋史の教授であった和田清で、やはり兵要地理調査研究会のメンバーでした。

**フロアB**：今井先生にお伺いします。私は韓国の漁村を研究していますので、その生態変化などを見るとときに、古い生態の知識が必要となりますし、どうしても漁との関係が気になります。本日のご報告で、大縮尺の海図が多い機密海図を用いて、人々の生活の営みを表現した情報を活用した調査・研究ができるといわれました（7. 機密海図利用の可能性）。

私としては、ここに漁業関係の情報が書き込まれているのであれば、非常にありがたいのですが、こういうのはどれほどの正確度があるのでしょうか。

**今井**：どうもご質問ありがとうございます。

漁業関係の利用としては、かつて日本に随分あった塩田や、養殖関係の施設。そういったものもよく入っています。韓国ですと、多分昔からノリの養殖なんかもあったのではないのでしょうか。そういった海図には当然ノリの養殖の粗朶（そだ）とか、そういうものが残っております。漁法の中では、大きな築（やな）なんかも海図にはよく入っています。大きな縮尺なのでそれがよく出ていると思います。こうした海図を使えば、当時の漁法や養殖などのやり方なども分かります。

日本の例ですけれども、東北のほうの金華山の辺りの明治時代の海図を見ていましたら、海岸から近くに魚見櫓という櫓があちこちに入っている。これは何のために利用するのかなということで、旧版水路誌を調べてみたら、お魚を捕る漁期にそこで観測するそうです。そして、網を入れるいろんな時期だとかを予測して、その合図でその辺一帯の漁師さんが協力して網を入れる。そのための施設だそうです。そういうものも入っていました。今はもうやっていないのですが、かつてそういう漁法があり、こうした施設が使われていたということが、海図から分かります。

塩田、養殖施設、それからいろんな漁法ですか、そういうもののが、大きい縮尺はもちろんあれば良いですが、5万分の1とか、あるいは10万分の1など、そのぐらいよりも大きい縮尺であれば十分それは判読できますし、それをまたかつての地元の歴史的な史料と突き合わせれば、そういったものに正確に意味づけができるかと思います。

正確度というお話ですが、測量する場合は基準がありまして、その基準に達して載せていますからそういう動かないもの、あるいは漁業権のエリアといったものは、きちっとデータが昔からあります。精度的には問題はないと思います。

それから、漁礁もしっかり入っていますので、その辺も読み取れるかと思いますね。漁礁は沖合の浅い浅瀬、それ以外にも人工的なものも入っておりますから、海図の上からはそういうものが、その時代時代で漁法は変わるとは思います。丹念に刊行年代別にずっと追って行けば、その辺がいつそういうものがそこで始まって、それがだんだん、例えば塩田なんかは今ほとんどないですよ。かつての、もう昭和の30年代ぐらいの海図見ますと、瀬戸内海も塩田がいっぱいありますし、それから、この前、東北の松島湾辺りの海図見ていましたら、あの辺りでも塩田をやっています。北限がどのぐらいか分かりませんが、かつてはかなり北のほうまでそういう塩田が、日本の海岸地帯一帯でやっていたということがよく分かりました。

**フロアB:** ありがとうございます。本日は機密海図の話をしていただいたのですが、これは航路などに関連があるのでしょうか。漁業に関連した情報が地図に載せられているのは日本地図の特徴なのか。それとも、他の国の海図にも同じような情報が載っているのでしょうか。

また、こういう資料は海上保安庁海洋情報部の「海の相談室」に行けば見られるのですが、そこでは外国の海図も見られるのでしょうか。

**今井:** いわゆる軍事的に使う図面も、それから一般の商船、あるいは漁船が通常に航海する場合もその危険度は同じです。ですから、航海安全に関わるようなものについては、普通の海図にも、あるいは機密の海図にも両方、平等に記載されています。今お話ししたような漁具の設置だとか、あるいは漁場の様々な問題というのは、機密海図だけでなく、一般の普通海図の旧版を調べても出てきますし、他の国の海図にも載っています。

外国の海図はちょっと難しいかもしれませんが、いわゆる朝鮮半島の沿岸でしたら、かつて日本がたくさんの海図を作っていましたから、それは残っています。船が航海するためにはどこでも行かなきゃいけないので、たくさんの普通海図が出ていますから、見られると思います。

**フロアC:** 小林先生にお聞きしたいのですが、特に第二次大戦当時、地図がろくに整備されていなかったというお話の中で、2万5,000分の1の地図ぐらいでないと言えないというお話がありました。

以前、私がインパール作戦について調べていたとき、チャンドラ・ボースの通訳をやっていたような日本陸軍の中尉クラスの人にも、「地図がろくなもんじゃなかった」という話を伺いました。地図についての話をもっと突っ込んで聞きたいと思っていたところで、その人が入院してしまって、全く接触ができなくなったのですが、今日のいろいろな地図の話聞きながら、これをちょっと思い出していました。

特にインパールは相当戦局の悪いときで、日本の歴史でも最も無謀な戦いと言わざるを得んのですが、地図についてもう少し当時の様子の手がかりになるようなお話をお聞きできればと思ったのですが、いかがでしょうか。

**小林:** インパール作戦については、その部分のイギリス製の地図の入手に失敗したのか、それとも入手していたものの、印刷や輸送が間に合わなかったのかよく分かりません。ある記録には、インパールに向かう道路を測量していたらイギリス軍の飛行機に狙われたと話が出てきますから、やはり地図を日本軍は十分に持ってなかった可能性は高いと思います。

ただし、しっかりした地図がないところでも戦闘はおこなわれました。日清戦争とか日露戦争では、将校や下士官は現場で地形図程度の縮尺のスケッチ図を作る訓練を受けてい

ますので、それを作りながら進撃しています。

去年亡くなった私の岳父も、兵卒としてインパール作戦に参加して何とか生き延びて帰ってきたわけですが、ただし末端の兵隊の場合は、地図についてはわからないことが多いと思います。

個々の作戦について実際にどうだったのかというのは、非常に分からないことが多いのですが、外邦図デジタルアーカイブでは、ミャンマーの政権の問題で、ビルマの外邦図は画像を公開していません<sup>2</sup>。公開したら、サイバー攻撃を受ける可能性があるという懸念があるからです。

それから、外邦図デジタルアーカイブでは、韓国の外邦図も公開していません。ただ2013年の秋に韓国に行って聞いてみましたら、ソウルの鐘路図書館が植民地期にできた5万分の1地形図の画像を公開していることが分かりました<sup>3</sup>。この関係者からも「公開しても全然問題はない」と言われていますので、朝鮮半島については公開すべきだと私も思っています。

外邦図について躊躇なく話題にできるようになったのが、十数年前ぐらいからです。さきほどから何度も紹介された坂戸さんに外邦図研究会で日本の機密海図について説明していただいたときに、誰かが機密海図のリストのコピーを講演会場の外の机に置いたら、「こんなところに置いておいたら駄目だよ」と言われました。戦中期の軍事秘密に対する意識を今でももっておられることがわかりました。

それから、坂戸さんから聞いた話ですが、水路部では暗号表も作っていました。暗号表というのは、水に溶ける紙に印刷されて、鉛の表紙がつけられていたということです。船が沈められたときに暗号表が海面に浮いてアメリカ軍に回収されたら困るので、鉛の表紙で必ず沈むように作られたわけです。それから、船が沈むときには、暗号を担当する通信兵というのは暗号表と一緒に沈むというのが義務になっていたようです。坂戸さんはずっと長い間、水路部で鉛の表紙の本を作っているのを見て、何のために作っているのかと思っていたのですが、『戦艦大和ノ最期』という本を読んでその話が出てきて、納得したとおっしゃっていました。ちょっと話が脱線しましたが。

上田：まだまだ話は尽きないかと思いますが、これで終えたいと思います。それでは長丁場になりましたけれども、どうもありがとうございました。

---

2. ただし、この講演記録を準備するに際し外邦図デジタルアーカイブの管理者に確認したところ、2013年11月以降ビルマの地形図を公開しているとのことであった。日本軍はこれに出ている外邦図を利用できたと考えられる。

3. ソウルの鐘路図書館の「韓国近代地図資料」は、下記のURLから閲覧できる。

<http://jongnolib.koreanhistory.or.kr/dirservice/main.do>

